

愛国心・国家主義と Loyalty という道徳的価値との関係性についての検討 —日本人を対象とした調査から—

青山 美樹 (日本大学 大学院総合社会情報研究科, bluemt47@gmail.com)

An examination of the relation between patriotism/nationalism and the moral value of loyalty:

From a survey of Japanese people

Miki Aoyama (Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University, Japan)

Abstract

Loyalty is one of six criteria for moral judgment advocated by moral foundations theory. Previous research has demonstrated that those who rely more on loyalty have a conservative orientation and a tendency toward nationalism. This study examined the relationship between orientations toward the two concepts of patriotism and nationalism, which can be seen as partial components of national identity, and the moral foundation of loyalty, which can be seen as innate to human beings. The study surveyed a sample of Japanese people with the aim of examining the topic from various angles to gain an understanding of how these concepts are linked. The study's results corroborate those of previous research and also confirmed the applicability to the Japanese population. Furthermore, these concepts were found to have the highest correlation with concepts that were related to history from among the six sub-concepts of loyalty. This suggests that in their orientation toward the nation, individuals place particular emphasis on the moral values shared among the people who make up a society, especially the value of history as a factual basis for sustaining that society, and further that these values can be subject to change through individual experience. The present study shows that perceptions toward one's own nation, history, and politics exist in an integrated manner in the identity of individuals and explains individual ideological orientations partly. Additionally, it reveals that Japanese people also regard patriotism and nationalism as different concepts—albeit only slightly different.

Key words

loyalty, patriotism, nationalism, moral foundation, history

1. はじめに

かつて人びとの幸せは共同体のなかにも存在すると考えられていた。人間は元来、集団を志向するように生まれついている。集団への志向によって人間は利己性を制御し、種を発展させてきたとされ、個体と集団という2つの水準で進化を遂げてきたと考えられている (Haidt, 2012 / 高橋訳, 2016, p. 339)。国家はある種の共同体として、人間が生き延びる最も強力な手段の一つとして在る (前田, 2001, p. 59)。と同時に、国家理性という言葉があるように、国家にはそれ自体に存在の意義があり、その目的は存在の維持と強化であり、そのために守らなければならない行動基準や法則が在る「大辞林」と考えられていた (松村, 2019)。

倫理・道徳は、Politike の考え方、すなわち古代ポリス (小都市国家) という共同体で人びとが共に幸せに生きるための生き方を追求することに始まったある種の社会規範である。加藤 (1912) は、「利己利他も国家生存に有利なるものは、善即ち道徳的になり、有害なるものは、悪即ち反道徳的なものになる。」 (古川・勝部・佐藤・波多野・村田, 1955, pp. 229-230) と述べ、国家それ自体に善悪の判断基準となりうる価値があるとした。このように、人間と国家はある種の内面的な関係で結ばれ (高山, 1976, p. 124)、そこに共同体を成す共同感情や共同意志がある (高

山, 1976, pp. 145-146) と考えられてきたのである。

「愛国心」や「民族アイデンティティ」は国家や民族をまとめるある種の求心力としてある (鄭, 2013, p. 104)。Kosterman & Feshbach (1989) は、「愛国心 patriotism」と「ナショナリズム (国家主義) nationalism」という2つの概念を示し、国家という存在が個人のアイデンティティが形成されるうえで重要な意味を持ち、とりわけ健全な「愛国心」は人間の幸せにとって必要な要素であると説いた。Takeuchi et al. (2016) も「愛国心」が人間の幸福に関連する脳領域の働きに関係していることを明らかにした。

一方、Graham, Haidt, Koleva, Motyl, Iyer, Wojcik, & Ditto (2013) が唱える道徳基盤理論では、人間の道徳性の構成要素の一つに「内集団への忠誠 loyalty/betrayal」をあげている。それは、社会という群れのなかで生きることを選択した人間が、進化の過程で、集団を維持し存続させていくことを最も価値あることの一つとしてとらえ、その観念が集団の成員によって共有され、個体に備わるようになった道徳的な基盤であると説明されている。

Koleva, Graham, Iyer, Ditto, & Haidt (2012) は、アメリカ人を被験者として、中絶、死刑、動物実験、安楽死、同性婚、同性愛、国旗損壊 (燃やすこと)、婚外出産、幹細胞研究、ポルノ、ギャンブル、不特定多数とのセックス、動物のクローニング、という賛否両論分かれる13の社会問題について、道徳的に間違っていると信じている程度 (道徳的不承認) を5段階で評価させ、さらに、中絶、国防費、進化論の教育、同性婚、拷問の使用、地球温暖

化、国旗損壊（燃やすこと）、幹細胞研究、テロとの闘い、不法移民、銃規制、の11の社会問題についての考え（特定の立場の支持）を、それぞれの選択肢から回答させるという2つの調査を行った。その結果、保守主義者における「内集団への忠誠 loyalty/betrayal」へのより高い依拠は、国旗を燃やすといった愛国的な象徴への攻撃に対してもより関心が高く、また、国防費や拷問の使用への関心が高いことから、敵と対峙するために内集団（国家を含む）を強化することが重要であると考えられる傾向がみられるとし、国家主義（nationalism）的な、あるいは国家の安全に関する問題において、「内集団への忠誠 loyalty/betrayal」という道徳的価値が最も強力な予測因子となっていたと報告している。

本研究はこれらの研究を踏まえ、Kosterman & Feshbach (1989) が示した「愛国心 patriotism」と「ナショナリズム（国家主義） nationalism」という2つの概念と、Graham et al. (2013) が仮定した「内集団への忠誠 loyalty/betrayal」という道徳基盤との関係性を、日本人を対象として検討していくことを目的とした。本研究のなかで、日本人が持つ「愛国心 patriotism」や「ナショナリズム（国家主義） nationalism」の観念が、道徳基盤理論から説明される道徳的価値とどのようにつながっているのかを示していく。

2. 本研究でとりあげる3つの概念の基本的な考え方

2.1 「愛国心」と「ナショナリズム（国家主義）」

人間のアイデンティティー確立への動機は、他者や他の社会との比較を通して、どのように自己規定がなされるのかという関心が生じることによる（田之内他，2014）。その際、内集団にはより高く、外集団にはより低い評価がなされる認知過程があると考えられている。

「愛国心 patriotism」と「ナショナリズム（国家主義） nationalism」はいずれもナショナル・アイデンティティー（国民意識）を形成する構成概念であると考えられている。Kosterman & Feshbach (1989) によれば、「愛国心」はその国に対する愛着としてみることができ、ある種の自尊心に基づく個人の幸福に関する問題であるとし、一方、「ナショナリズム（国家主義）」にはその国の優位性や支配的な考え方への志向が示されているという。これらの2つの概念にはある程度の相関がみられるものの、多くの点で明確に区別され、異なる認知過程を辿って生起する、機能的に異なる2つの心理的側面であると説明されている。Takeuchi et al. (2016) の研究からも、「愛国心」と「ナショナリズム（国家主義）」が異なる脳領域の活動と対応し、異なるメカニズムがあることが示されている。

2.2 「内集団への忠誠 loyalty/betrayal」

道徳基盤理論（Graham et al., 2013）では、人間の道徳的判断というものが、個体に生得的に備わる複数の道徳基盤から多面的にもたらされ、道徳的な逸脱場面において異なる直観的な判断を生起させていると主張されている。現在道徳基盤理論で提案されているのは、「保護／傷つけないこと care/harm」（以下、Care という）、「公正さ

fairness/cheating」（以下、Fairness という）、「内集団への忠誠 loyalty/betrayal」（以下、Loyalty という）、「権威への敬意 authority/subversion」（以下、Authority という）、「純正さ・神聖さ sanctity/degradation」（以下、Sanctity という）、「自由／抑圧からの解放 liberty/oppression」（以下、Liberty という）という6つの道徳基盤である。これらはそれぞれに下位概念を持ち、これらの概念によって道徳的判断の多面的な基準が説明されている。これらはまた、Care と Fairness の2領域からなる Individualizing foundations（個人の尊厳）と、Loyalty、Authority、Sanctity の3領域からなる Binding foundations（義務などへの拘束）の2つの上位概念（金井，2015）にまとめられ、前者には政治的な志向としてのリベラル（自由主義者）がより高い価値をおき、後者には保守主義者がより高い価値をおくと主張されている（Graham, Haidt, & Nosek, 2009）。このことは、人間の道徳的判断が、大きく個人と社会という2つの基準に基づいていることを意味している。

そのなかで Loyalty の基盤は、人間が社会という外的な基準に価値を置き、結束と維持を重視して、その逸脱に敏感に反応するように獲得されたある種の機能であると考えられている。Loyalty の構成要素として、「忠誠 loyalty」「裏切り betray」「愛国 love country」「歴史 history」「家族 family」「チーム team」の6つの下位概念が仮定され（Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva, & Ditto, 2011）、これらの概念から Loyalty に含有される価値的側面が説明されている。

3. 本研究の目的

本研究は、人びとのナショナル・アイデンティティー（国民意識）を構成する「愛国心」と「ナショナリズム（国家主義）」という2つの因子と、道徳基盤理論が仮定する道徳基盤、特に Loyalty の基盤に注目して、これらの関係性をさまざまな角度から実証的にとらえ、日本人のなかでこれらがどのように関連しているのかを示していくことを目的とした。

まず、Loyalty という道徳基盤が国家主義的な考え方の予測因子となっていたとする Koleva et al. (2012) の結果を踏まえ、日本人においても同様の関係性がみとめられるかどうかを検証した（検証1）。さらに、それらの関係性をより深く理解するため、Loyalty という道徳的価値を説明する6つの下位概念のそれぞれと、「愛国心」「国家主義」との関係性の強さについて検証した（検証2）。

また、Graham et al. (2009) が主張する道徳基盤と政治的志向との関係性、すなわち、リベラル（自由主義者）が Individualizing foundations により高い価値をおき、保守主義者が Binding foundations により高い価値をおくとする関係性が、国民意識を構成する「愛国心」や「国家主義」と政治的志向とのあいだにもみとめられるかどうかを検証した（検証3）。Koleva et al. (2012) では、政治的志向（信条）も個人の政治的な態度を予測するとしているが、同研究では「愛国心」と「国家主義」を明確に区別しておらず、本検証ではこれらを区別して検証した。さらに、「愛国心」、

「国家主義」、道徳基盤への関心の高さが年代の違いによって異なっているかどうかについても検証した(検証4)。

最後に、「愛国心」と「国家主義」が異なる概念であるとする Kosterman & Feshbach (1989) の主張が、日本人においてもみとめられるかどうかについても考察を加えた。

4. 方法

4.1 調査方法

調査は2020年5月29日～31日にオンライン調査として実施した。データ収集は都内の調査会社X社に委託し、マトリックス形式の調査票を用いて、それぞれの尺度の評定法により選択回答させた。

4.2 調査対象

回答者はX社に登録されている日本全国100万人超のモニター⁽¹⁾から無作為に抽出された18歳以上60歳以下の日本で生まれ育った日本人500名で、性別(男性250名、女性250名)と年齢層(18～20歳:40名、21～30歳:115名、31～40歳:115名、41～50歳:115名、51～60歳:115名)の割合が偏らないよう配慮した(平均年齢38.9歳、SD=12.56)。

4.3 調査内容

フェイスシートでは、性別(男/女の2択)、年齢層(18～20歳/21～30歳/31～40歳/41～50歳/51～60歳の5択)、政治的な考え方(保守主義的/やや保守主義的/やや自由主義的/自由主義的/どちらでもない、の5択)を確認した。

国民意識(ナショナル・アイデンティティ)尺度(唐沢, 1994; Karasawa, 2002)は、「国家的遺産への愛着」(8項目)、「愛国心」(7項目)、「国家主義」(6項目)、「国際主義」(6項目)の合計27項目で構成されている。これは、Kosterman & Feshbach (1989) が提案した「愛国心」「国家主義」「国際主義」の3因子に、日本人に特有と考える「国家的遺産への愛着」の1因子を加えたものである。本調査ではこのうち、「内集団への忠誠 loyalty / betrayal」の概念を直接的に説明しようと考える「愛国心」と「国家主義」の合計13項目を使用した。「以下の各文について、あなたの考えにあてはまる評価を選択してください」という質問文に続き、各項目の内容について「1: 反対」から「5: 賛成」の5段階で回答させた。そして、各項目の得点を2つのカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

道徳基盤質問票(Moral Foundations Questionnaire; 以下、MFQという; Graham et al., 2011)は、道徳的判断の基準、すなわち道徳性の構成概念をとらえる調査票として作成された。本調査では、金井(2015)による翻訳の一部を本人および原著者の許可を得て変更した日本語版(青山, 2019; 2020)を用いた。MFQは道徳基盤理論の提案初期に作成されており、Libertyを含まない、Care、Fairness、Loyalty、Authority、Sanctityの5つの道徳基盤に基づいている。MFQは、第一部の「Relevant 道徳との関連度」を

測る15の項目群(以下、MFQ1という)と、第二部の「Judgment 道徳的判断」を測る15の項目群(以下、MFQ2という)で構成され、各項目群に1問ずつ操作チェックが加えられている。MFQ1は、「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するとき、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係しますか」という質問文に続き、各項目の内容について「1: まったく関係しない(判断にまったく無関係)」から「6: 極めて関係する(判断に最も重要)」の6段階で評価させた。MFQ2は、「次の文を読んで、あなたがどの程度同意するかを、以下の6段階から選んでください」という質問文に続き、各項目の内容について「1: まったく同意しない」から「6: 非常に同意する」の6段階で評価させた。そして、操作チェックの2項目を除き、両群の得点を5つのカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

道徳基盤冊子(Moral Foundations Vignettes; 以下、MFVsという; Clifford, Iyengar, Cabeza, & Sinnott-Armstrong, 2015)は、MFQでは明らかにとらえることができなかった複数の道徳領域を区別してとらえることが目指された調査票である。MFVsも道徳基盤理論に基づき作成された調査票であるが、本調査で用いた日本語版の因子構造は原版とは若干異なり、Care (weak 弱者)(5項目)、Care (harm 危害)(5項目)、Fairness (4項目)、Liberty (5項目)、Loyalty (5項目)、Sanctity (4項目)の6つの領域で構成され、Authorityの領域が含まれない(青山, 2020)。本研究ではこのMFVsをMFQの補助的な調査票として用いた。「次にあげるシナリオを実際あなたが目にしている光景として想像してください。そのうえで、それらの行為を以下の5段階で評価してください。」という質問文に続き、それぞれのシナリオが描写している第三者の不道徳的な態度を「1: まったく悪くない」から「5: 極めて悪い」の5段階で評価させた。そして、それぞれの得点をカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

調査票は、フェイスシート、MFVs、MFQ、国民意識尺度の順に、それぞれの尺度のなかで同じカテゴリーの項目が続かないよう無作為に提示して順序効果を回避した。

4.4 検証方法

まず、「愛国心」や「国家主義」の考え方と道徳基盤とのあいだに、Koleva et al. (2012)と同様の関係性がみとめられるかどうかを検証するため、国民意識尺度の「愛国心」「国家主義」の2因子と、MFQの5因子、MFVsの6因子のそれぞれの相関の強さを比較して評価した。(検証1)

次に、「愛国心」や「国家主義」の考え方とLoyaltyへの志向との関係性をより詳しくとらえるため、「愛国心」「国家主義」とLoyaltyを説明する6つの下位概念を含むMFQの30全ての項目との相関の強さを比較して評価した。(検証2)

さらに、「愛国心」や「国家主義」の考え方が、道徳基盤と同様に、政治的な考え方(政治的志向)の違いによって異なっているかどうかについて検証するため、MFQと

MFVs の Loyalty、MFQ の Individualizing foundations (Care と Fairness) と Binding foundations (Loyalty、Authority と Sanctity)、「愛国心」、「国家主義」のそれぞれの平均得点を、政治的な考え方の 5 水準毎に比較して評価した。(検証 3)

またさらに、「愛国心」や「国家主義」の考え方、および Loyalty への志向が、年代の違いによって異なっているかどうかについて検証するため、「愛国心」、「国家主義」、MFQ と MFVs の Loyalty のそれぞれの平均得点を、5 つの年齢層毎に比較して評価した。(検証 4)

これらの検証から、「愛国心」や「国家主義」の考え方と道徳基盤、特に Loyalty との関係性が日本人においてどのようなものであるかを総括するとともに、「愛国心」と「国家主義」が日本人においても異なる 2 つの概念としてとらえられているかどうかについても考察を加えた。

5. 結果

まず、MFQ の 2 問の操作チェックから、500 のうち 82 のデータを無効とし⁽²⁾、残りの 418 のデータを採用した。

5.1 検証 1

検証 1 の結果を表 1 に示す。「愛国心」「国家主義」の 2 つの因子と、MFQ および MFVs の全ての道徳基盤との相関は、MFQ の Loyalty に対して、「愛国心」($r = .40$)、「国家主義」($r = .32$) とともに有意な正の相関を示し、相対的にみて他の道徳基盤よりもやや強い相関を示した。しかし、いずれも Loyalty のみならず、他の道徳基盤とも有意な相関を示した。

MFVs の Loyalty に対しても、「愛国心」($r = .21$)、「国家主義」($r = .29$) とともに有意な正の相関を示し、相対的にみて他の道徳基盤よりもやや強い相関を示した。しかし、いずれも Liberty や Sanctity との相関は有意ではなく、「国家主義」では Care (weak) との相関も有意ではなかった。

また、MFQ では、全体として「愛国心」が「国家主義」

表 1: 「愛国心」「国家主義」と道徳基盤との相関 ($N = 418$)

	道徳基盤	愛国心	国家主義	α
MFQ	Care	.24**	.17**	.76
	Fairness	.19**	.12*	.66
	Loyalty	.40**	.32**	.69
	Authority	.32**	.27**	.69
	Sanctity	.26**	.22**	.74
MFVs	Care (weak)	.11*	.07	.90
	Care (harm)	.19**	.19**	.90
	Fairness	.18**	.18**	.85
	Liberty	-.03	-.01	.88
	Loyalty	.21**	.29**	.83
	Sanctity	.06	.09	.77
	愛国心	—	—	.88
	国家主義	—	—	.76

注: ** $p < .01$; * $p < .05$.

よりも道徳基盤とのやや強い相関を示したが、MFVs では、Loyalty に対して「愛国心」($r = .21$) よりも「国家主義」($r = .29$) のほうがやや強い相関を示した。

5.2 検証 2

検証 2 の結果を表 2 に示す。「愛国心」「国家主義」の 2 つの因子と、MFQ の 30 全ての項目 (30 の下位概念) との相関は、Loyalty の下位概念の「家族 family」では、「国家主義」との相関は有意ではなく ($r = .09$)、項目の信頼性も低かった。その他の下位概念では、「愛国 love country」では、「愛国心」($r = .24$)、「国家主義」($r = .23$)、「裏切り betray」では、「愛国心」($r = .22$)、「国家主義」($r = .23$)、「忠誠 loyalty」では、「愛国心」($r = .18$)、「国家主義」($r = .20$)、「チーム team」では、「愛国心」($r = .23$)、「国家主義」($r = .10$) と、いずれも有意な正の相関を示し、なかでも「歴史 history」に対しては、「愛国心」($r = .50$)、「国家主義」($r = .35$) とともに、他の項目と比較して最も強い相関を示した。

検証 2 でも、全体として「愛国心」は「国家主義」よりも道徳基盤とのやや強い相関を示した。また、Loyalty の「家族 family」、Care の「弱者 weak」、Fairness の「公平 fairly」、Authority の「無秩序 chaos」、Sanctity の「品位 decency」との相関においては「愛国心」のみが有意となり、また、Fairness の「権利 rights」との相関では、「愛国心」では正の、「国家主義」では負の相関がみられるなど、道徳基盤との関係性において、「愛国心」と「国家主義」の 2 つの因子には若干の違いがみられた。

5.3 検証 3

検証 3 の結果を図 1 に示す。MFQ および MFVs の Loyalty と、MFQ の Individualizing foundations と Binding foundations、そして「愛国心」「国家主義」のそれぞれの平均得点 (MFQ のみ 6 段階評価で、他は 5 段階評価) を政治的志向毎にみたところ、先ず、Graham et al. (2009) では保守主義者よりも自由主義者がより高い関心を示すとされている Individualizing foundations において、政治的志向による有意差はみとめられなかった ($F(4, 413) = 0.60$, $p = .66$)。それ以外は、「自由主義」よりも「保守主義」を志向する人の平均得点がより高く、この傾向は Graham et al. (2009) と同様であった。このうち、MFQ の Loyalty ($F(4, 413) = 5.53$, $p < .01$)、Binding foundations ($F(4, 413) = 4.68$, $p < .01$)、「愛国心」($F(4, 413) = 8.17$, $p < .01$)、「国家主義」($F(4, 413) = 5.15$, $p < .01$) では、いずれも政治的志向による有意差があることがみとめられたが、MFVs の Loyalty ($F(4, 413) = 2.34$, $p = .06$) では有意な差があるとはいえなかった。

そのなかで、「国家主義」の平均得点は、「やや保守主義」、「やや自由主義」、「自由主義」、「どちらにもあてはまらない」を志向する人ではほとんど差がなかったが ($SD = .04$)、「保守主義」を志向する人では、他の水準と比較して得点が高かった ($SD = .18$)。

また、「愛国心」と「国家主義」の平均得点の差は、「自由主義」($SD = .04$) や「やや自由主義」($SD = .02$) を志

表 2: 「愛国心」「国家主義」と道徳基盤の下位概念との相関 ($N = 418$)

項目	道徳基盤	下位概念	愛国心	国家主義	削除された 場合の α
q1		emotionally 精神	.09	.04	.70
q2		weak 弱者	.12*	.09	.69
q3	Care	cruel 残虐	.17**	.11*	.70
q16		compassion 思いやり	.22**	.10*	.75
q17		animal 動物	.22**	.19**	.74
q18		kill 殺人	.18**	.17**	.79
q4		treated 待遇	.13**	.11*	.59
q5		unfairly 不当	.19**	.16**	.56
q6	Fairness	rights 権利	.05	-.02	.56
q19		fairly 公平	.13**	.07	.63
q20		justice 正義	.26**	.19**	.65
q21		rich 裕福	-.03	-.06	.71
q7		love country 愛国	.24**	.23**	.63
q8		betray 裏切り	.22**	.23**	.63
q9	Loyalty	loyalty 忠誠	.18**	.20**	.60
q22		history 歴史	.50**	.35**	.65
q23		family 家族	.14**	.09	.71
q24		team チーム	.23**	.10*	.66
q10		respect 敬意	.16**	.15**	.58
q11		traditions 伝統	.18**	.17**	.60
q12	Authority	chaos 無秩序	.13**	.10	.67
q25		kid respect 尊敬	.25**	.23**	.64
q26		sex roles 性役割	.27**	.24**	.69
q27		soldier 兵士	.22**	.14**	.68
q13		decency 品位	.08	.11*	.67
q14		disgusting 嫌悪	.09	.09	.67
q15	Sanctity	divine 神聖	.18**	.17**	.72
q28		harmless disgusting 不快	.26**	.20**	.72
q29		unnatural 異常	.26**	.16**	.71
q30		chastity 純潔	.20**	.16**	.73

注: ** $p < .01$; * $p < .05$. 下線は信頼性が低いとみられる項目。

向する人では小さかったが、それらと比較して、「保守主義」($SD = .14$) や「やや保守主義」($SD = .18$) を志向する人ではやや大きかった。

Loyalty との関係でも、「やや保守主義」を志向する人では、MFQ の Loyalty と「国家主義」の平均得点の差はやや大きく ($SD = .22$)、「愛国心」の平均得点により近かったが ($SD = .03$)、「自由主義」を志向する人では、MFQ の Loyalty と「愛国心」($SD = .03$) や「国家主義」($SD = .07$) との平均得点の差は小さく、Loyalty、「愛国心」、「国家主義」がより近い概念としてとらえられているとみることができた (ただし、MFQ のみ 6 段階評価)。

5.4 検証 4

検証 4 の結果を図 2 に示す。MFQ および MFVs の Loyalty、「愛国心」、「国家主義」のそれぞれの平均得点

(MFQ のみ 6 段階評価で、他は 5 段階評価) を 5 つの年齢層毎にみたところ、MFQ および MFVs の Loyalty と「愛国心」の平均得点は、いずれも 20 歳以下 ($M = 3.79$) の年齢層では相対的に高く、21 ~ 30 歳 ($M = 3.60$) および 31 ~ 40 歳 ($M = 3.59$) の年齢層では相対的に低いが、41 ~ 50 歳 ($M = 3.85$) の年齢層では 20 歳以下の年齢層と同様かそれ以上に高いという傾向をみせた。しかし、51 歳以上になると、MFQ や MFVs の Loyalty の平均得点 ($M = 3.79$) は 41 ~ 50 歳の年齢層よりも若干低くなっているのに対し、「愛国心」の平均得点 ($M = 3.94$) は逆に高くなっており、異なる傾向をみせた。

そのなかで、MFVs の Loyalty ($F(4, 413) = 4.34, p < .01$)、「愛国心」($F(4, 413) = 3.84, p < .01$) では年齢層の違いによる有意差がみとめられたが、MFQ の Loyalty ($F(4, 413) = 1.51, p = .20$) では有意な差があるとはいえなかつ

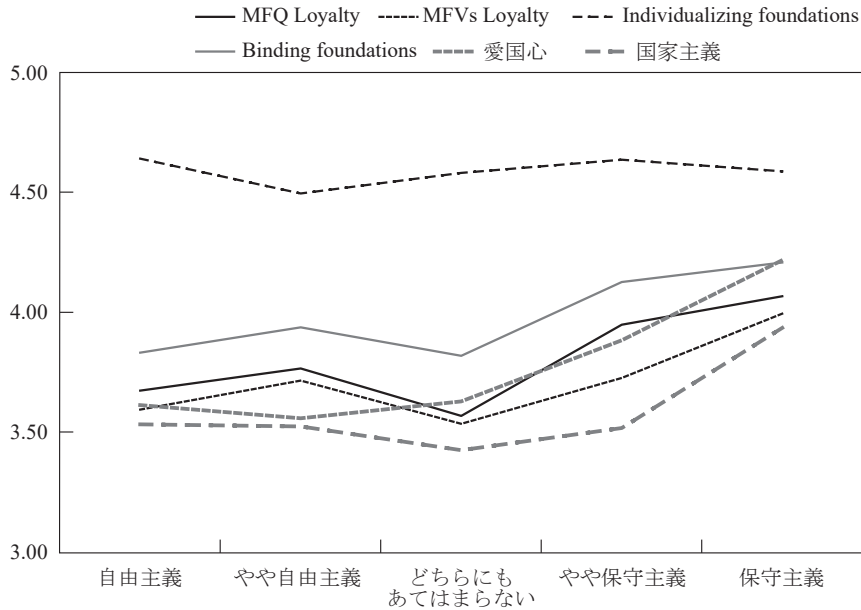


図 1: 政治的志向毎にみた Loyalty、Individualizing foundations、Binding foundations と「愛国心」「国家主義」の平均得点

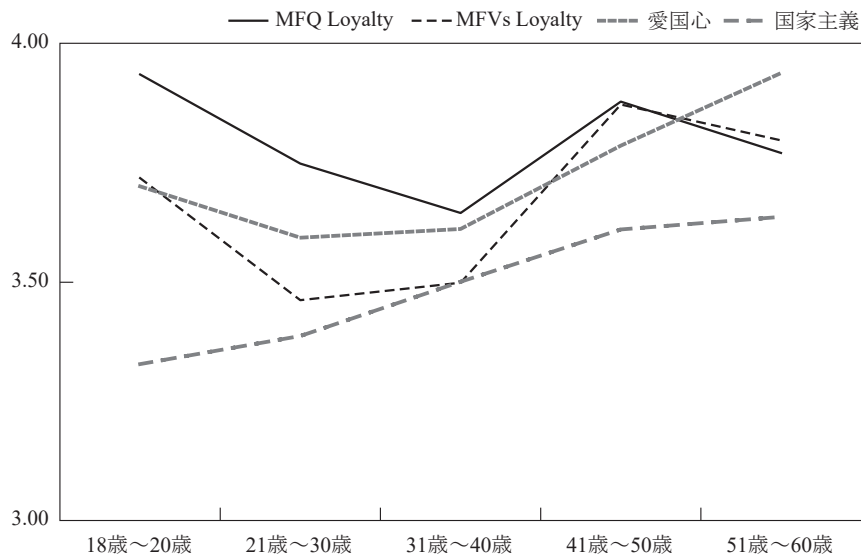


図 2: 年齢層毎にみた Loyalty と「愛国心」「国家主義」の平均得点

た。一方、「国家主義」の平均得点は、20歳以下の年齢層では相対的にみて低いが、年代があがるにつれてより高いという傾向がみられ（18～20歳： $M = 3.39$ 、21～30歳： $M = 3.33$ 、31～40歳： $M = 3.50$ 、41～50歳： $M = 3.61$ 、51～60歳： $M = 3.64$ ）、年齢層の違いによる有意差もみとめられた（ $F(4, 413) = 3.62, p < .01$ ）。

また、「愛国心」と「国家主義」の平均得点の差は、20歳以下（ $SD = .19$ ）や51歳以上（ $SD = .15$ ）の年齢層でやや大きかったが、それらと比較して、21～30歳（ $SD = .10$ ）や41～50歳（ $SD = .09$ ）の年齢層では得点の差はより小さく、31～40歳（ $SD = .06$ ）では「愛国心」と「国家主義」がより近い概念としてとらえられているとみることができた。

Loyalty との関係でも、20歳以下では「国家主義」（ SD

$= .30$ ）よりも「愛国心」（ $SD = .12$ ）が Loyalty により近く、一方、51歳以上では逆に「愛国心」（ $SD = .08$ ）よりも「国家主義」（ $SD = .07$ ）が Loyalty により近かった。そして、31～40歳では、Loyalty、「愛国心」、「国家主義」がより近い概念としてとらえられているとみることができた（ $SD = .07$ ）（ただし、MFQ のみ 6 段階評価）。

6. 考察

検証 1 の結果から、「愛国心」「国家主義」と道徳基盤とのあいだには、幅広い領域での相関がみとめられ、「愛国心」や「国家主義」への関心が高いほど、道徳的価値に対する関心も高く、なかでも Loyalty に対する関心がより高いことが示された。このことは、日本人においても、Loyalty が国家主義的志向を予測する因子としてみ出すこ

とができ、Koleva et al. (2012) を裏付けるような結果であったとみることができるのではないかと考えられた。

また、Koleva et al. (2012) では、国家主義的な考え方と複数の道徳基盤とのあいだに相関がみられたことについて、さまざまな道徳的直観の複雑なトレードオフが行われている可能性があると考えられており、本研究からも、「愛国心」や「国家主義」の考え方には複数の道徳基盤の複合的な関与が示唆されていたとみることができた。一方、MFQ は、道徳性の理解において幅広い下位概念を想定し、そのため項目の内的一貫性が低いとされている (Graham et al., 2011)。特に、Care と Fairness や、Loyalty と Authority を異なる基盤として区分することについてのさまざまな見解がある (Graham et al., 2013)。本研究のなかで補助的に用いた MFVs では、他の基盤と比較して最も相関の強かった Loyalty の基盤は、「愛国心」や「国家主義」の考え方を特に予測しうる因子としてみることができ、一方、Care (harm) や Fairness の考え方、すなわち、他者を傷つけないことや社会が公正であることへの価値意識も、「愛国心」や「国家主義」への志向の根底に弱いながらも存在しているとみることができるのではないかと考えられた。

Koleva et al. (2012) では、Purity (本研究では Sanctity) の因子もまた重要な意味を持っているのではないかと考えられていた。本研究の結果からは、「愛国心」や「国家主義」に対して、MFQ の Sanctity は他の因子と同様の相関をみせ、一方、MFVs の Sanctity は有意な相関を示さなかった。このことから、Sanctity は Loyalty 以上に国家主義的志向を予測する因子ではないとみることができるのではないかと考えられた。

検証 2 の結果からは、「愛国心」「国家主義」と、Loyalty を説明する 6 つの下位概念との関係性において、「愛国 love country」「裏切り betray」「忠誠 loyalty」「チーム team」との相関がみとめられ、そのなかでも、「歴史 history」に対して相対的にみて最も高い関心が示された。Loyalty 以外の Care、Fairness、Authority、Sanctity のすべての基盤においても、幅広い下位概念との相関がみとめられたが、それらと比較して Loyalty の「歴史 history」との相関は特に際立つものであった。このことから、「愛国心」や「国家主義」が、Loyalty のなかでも主として「歴史 history」の因子から予測されうる概念であるとみることができるのではないかと考えられた。

そのなかで、自尊心に関する「愛国心」は、国家の優位性への志向を含む「国家主義」よりも、MFQ の道徳基盤全般とのより強い相関を示していた。一方 MFVs では、Care (harm) や Fairness に対して「愛国心」と「国家主義」との相関の強さは同等で、Loyalty に対しては「愛国心」よりもむしろ「国家主義」のほうが僅かながらより強い相関を示していた。これは、MFQ が幅広い道徳領域を想定し (例えば、Loyalty は国家に限らず team, family 等を含む)、道徳的判断や道徳的原理に対する是認の度合いを自己報告させるように作られているのに対し、MFVs はより特定の場面を想定し (例えば、Loyalty は 5 項目中 4 項

目が国家に関する内容)、描写されている道徳的な逸脱行為に対する不承認の度合いを直感的に評価させるように作られていることにも関係しているかもしれない。

検証 3 の結果からは、「愛国心」や「国家主義」への志向が、MFQ の Loyalty や Binding Foundations と同様に、政治的な志向の違いによって有意に異なっていることが示された。いずれも自由主義者よりも保守主義者のほうが志向が高く、このことは、道徳基盤や政治的志向が国家主義的な態度を予測するとした Koleva et al. (2012) の主張をある側面で裏付ける結果であったといえるのではないだろうか。しかし、Graham et al. (2009) や Graham et al. (2011) と比較して、日本人の保守主義者と自由主義者の道徳的関心の高さの差は小さく、国民意識においても同様であった。

一方、政治的な志向に関わらず、日本人は総じて Individualizing foundations、すなわち Care と Fairness に高い価値を置いていることが示された。青山 (2019) では、日本人の自由主義と保守主義の考え方を分けているのは、「個人の尊厳」(Individualizing foundations、すなわち Care や Fairness) ではなく、「義務などへの拘束」(Binding foundations、すなわち Loyalty、Authority、Sanctity) に対する考え方ではないかと推察しており、本研究の結果からも、保守主義的な考え方を予測するうえで、とりわけ Loyalty への志向の高さが指標となり、同時に国家や歴史に対する考え方、あるいは国民意識の高さを予測することにもつながっているのではないかと考えられた。

そのなかで、「愛国心」と「国家主義」は、「自由主義」に近いほど同様の概念としてとらえられていたが、「保守主義」に近いほど異なる概念としてとらえられているとみることができた。また Loyalty も、「自由主義」に近いほど「愛国心」や「国家主義」と同様の概念としてとらえられていたが、「やや保守主義」では「国家主義」よりも「愛国心」により近く、逆に「保守主義」では、「愛国心」よりも「国家主義」により近い概念としてとらえられているとみることができた。

検証 4 の結果からは、「愛国心」や「国家主義」への志向が、年代の違いによっても有意に異なっていることが示された。Loyalty への志向や「愛国心」は年代によって浮き沈みがあるが、「国家主義」への志向は 20 歳以下では相対的にみて低いものの、年代が上がるにつれて確実に高くなっていった。そのなかで、「愛国心」と「国家主義」への志向の高さは、20 歳以下や 51 歳以上の年齢層ではやや差が大きく、2 つが異なる概念としてとらえられているとみることができた。また、Loyalty は、若い年代では「愛国心」により近く、年代が上がるほど「国家主義」により近い概念としてとらえられているとみることができた。年代の違いによるこれらの志向の違いは、「愛国心」や「国家主義」では、教育や社会経験等による国家に対する見方の違い、あるいはその経年的な変化として考えることができ、また、国家に限らずより幅広い集団を想定している Loyalty では、年代によって異なる所属集団とその重要性に対する認識の違い、あるいはその経年的な変化の

表れとして考えることができる。そして、31～40歳では「愛国心」、「国家主義」、Loyalty が、同様の見方でとらえられているのではないかと考えることができた。

これまでの検証から、「愛国心」や「国家主義」が Loyalty という道徳基盤から予測されうる態度であるということが示された。また、これらが道徳基盤と同様に、政治的な考え方からも予測されうる態度であるということも示された。これらの結果は、人びとが持つさまざまな価値志向的な態度の根本に道徳基盤があるとする Koleva et al. (2012) や Graham et al. (2011) の主張を支持し、日本人においても、個人の志向性あるいは傾向性を説明しうる因子の一つとして道徳基盤があることを示唆する結果であったといえるのではないだろうか。そのなかで、特に「歴史 history」という概念が「愛国心」や「国家主義」を予測する因子となっているとみられたことは、個人のナショナル・アイデンティティー（国民意識）が形成されるなかで、その社会を成立させている人びとに共有される道徳的価値、とりわけその社会を存続させてきた事実としての歴史という価値が、国家に対する見方において、特に重要な要素としてとらえられている可能性があると考えられた。

「愛国心」「国家主義」と道徳基盤との関係は、特に MFQ においては「国家主義」よりも「愛国心」が道徳基盤とより強く関連し、下位概念との関連においても、「愛国心」と「国家主義」が道徳基盤の全く同じ領域と対応しているわけではないことが示された。また、政治的な志向や年代の違いにおいて、2つの概念は類似した傾向をみせながらも、いくつかの側面において異なる傾向を持っていることが示された。「愛国心」はより個人的な見方で、「国家主義」はより社会的な見方で、国家に対して示される態度であると考えられているように (Kosterman & Feshbach, 1989)、本研究の結果からも、「愛国心」と「国家主義」が異なる見方に立つ、異なる概念としてとらえられているとみることができないのではないかと考えられた。しかし、日本人においてその違いの程度は Kosterman & Feshbach (1989) と比較して小さいといえ、また、それらが教育や人びとをとりまく社会環境の変化によって、容易に変わりうる観念なのではないかと考えることもできた。

7. おわりに

本研究では、人びとのナショナル・アイデンティティー（国民意識）を構成する「愛国心」や「ナショナリズム（国家主義）」の考え方と、個体に備わると考えられている道徳基盤とがどのように関連しているのかを、4つの検証から検討した。「愛国心」や「ナショナリズム（国家主義）」から映し出された日本人の国家に対する志向性は、集団の結束と維持に価値をおく Loyalty という特定の道徳基盤によって予測されうるものであり、そのなかでも、特に「歴史 history」という道徳的価値が重要な指標となっている可能性があることが示された。さらに、「愛国心」や「ナショナリズム（国家主義）」が道徳基盤のみならず政治的

な志向からも予測されうるということが示唆され、国家や歴史に対する考え方と政治に対する考え方が個人のアイデンティティーのなかに一体的に存在し、個人の志向性あるいは傾向性の側面を説明していると考えることができた。そのなかで、日本人の国家や政治に対する考え方には、世論を分断するような大きな乖離はなく、比較的平均した考え方を持ち、むしろ他者を傷つけないことや社会が公正であることに一様に高い価値を置いているということができた。

国家と政治、歴史との結びつきについては、これまで主として哲学的・社会学的な見方で論じられてきた。大澤 (2007) は、政治的共同体としてのネーションを、他とは異なるものとして特徴づけているのは歴史の特殊性であり (pp. 82-83)、国家主義 (ナショナリズム) とはその特殊性に価値を見出す態度である (p. 393) と述べた。スミス (Smith, 1986 / 巢山他訳, 1999) もまた、それぞれの共同体の文化的差異や歴史的連続性のなかに政治的主張があり、ナショナリズムが生まれる理由があるとし (p. 184)、共通の歴史を持つことで人びとは世代を超えた絆を作り出してきた (p. 32) と述べている。そして、人びとはそのような自己が属する国家のさまざまなことに対して誇りや自負心によって、自己肯定に繋がるナショナル・アイデンティティーを形成してきた (田辺, 2001) と考えられてきたのである。本研究の結果は、こうした見方がある側面の後押しするものとなったということができないのではないだろうか。

一方、1995年の ISSP (International Social Survey Program) のデータに基づく田辺 (2001) の研究では、ナショナル・アイデンティティーというものが独自の社会的・歴史的背景の影響を受けているとしながらも、そのなかで日本人の文化的ナショナル・プライドは、科学技術や文学芸術等に比べ、歴史に対してさほど高い因子負荷量を示していなかった。「文化的ナショナル・プライド」と「愛国心」や「国家主義」を単純に比較することはできないが、この結果からは、歴史に対する見方には、誇りや自尊心を伴う道徳的価値としての見方のほか、それ以外の見方、あるいは年代によって異なる見方がある可能性も示唆されており、追加的考察の必要性を含んでいるといえる。

また、本研究では国民意識尺度の「愛国心」と「国家主義」の2因子のみを用いて検証を行った。Karasawa (2002) は、日本人のナショナル・アイデンティティーを構成する4因子のなかでも、特に「国家的遺産への愛着」が重要な因子であるとしており、より広範な意味での日本人のナショナル・アイデンティティー（国民意識）をとらえていくうえでは、4因子全てを用いた検証が行われる必要があるだろう。特に、本研究の結果、日本人の国家に対する志向と歴史への志向とのあいだには相関があることが示されており、「国家的遺産への愛着」が道徳基盤とのあいだに何らかの関係性を示し、本研究の結果を後押しする可能性もある。これについては今後の課題としてあげられよう。

国家と政治、そしてそれらを繋いできた歴史との関係

性について、道徳基盤理論の考え方に基づいた本研究から得られた結果は限定的であった。これらの関係性をさらに深く心理学的アプローチによって追究していくことが今後求められていく重要なテーマであると考えている。

謝辞

本論文は著者が令和2年度に日本大学大学院総合社会情報研究科へ提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。本論文を作成するにあたり熱心にご指導賜りました田中堅一郎教授に心より感謝申し上げます。

また、本研究における倫理的配慮について、調査対象者は個人の自由意志に基づき調査に協力し、それによっていかなる不利益を被ることがないこと、および個人の特定につながる一切の情報が保護されることが保障された。その他、本論文では開示すべき利益相反関連事項はない。

注

- (1) 同社のモニターはアンケートを目的としたサイトに自ら申し込みアンケート会員になっている。調査に協力すると謝礼のポイントが付与され、貯まると金券や現金等と交換でき、これが調査協力のインセンティブとなっている。パネル全体の職業構成比は、有職者50%、専業主婦16%、パート・アルバイト12%、学生13%、その他9%で(2016年時点)、本調査の回答者もこの比率に近い割合で構成されていると考えられる。
- (2) 先行研究に倣い、MFQ1では「数学が得意であったかどうか」という設問に対し「5:とても関係する」「6:極めて関係する(判断に最も重要)」の2水準で強く「関係する」と評価した回答を切り捨て、MFQ2では「悪い行いよりは良い行いをしたほうがよいに決まっている」という設問に対し「1:まったく同意しない」「2:あまり同意しない」「3:どちらかといえば同意しない」の3水準で「同意しない」と評価した回答を切り捨てた。

引用文献

- 青山美樹 (2020). 「嫌悪」の感受性と「神聖さ／純粋さ」という道徳的価値との関係性についての検討—日本人を対象とした調査から—。人間環境学研究, 18 (2), 187-196.
- 青山美樹 (2019). 日本人の観念形態を探る心理学的アプローチ—道徳基盤理論における道徳性と政治的志向性の考え方に基いて—。国際情報研究, 16 (1), 12-23.
- Clifford, S., Iyengar, V., Cabeza, R., & Sinnott-Armstrong, W. (2015). Moral foundations vignettes: A standardized stimulus database of scenarios based on moral foundations theory. *Behaviour Research and Therapy*, 47, 1178-1198.
- 古川哲史・勝部真長・佐藤俊夫・波多野述磨・村田宏雄 (編) (1955). 倫理学名著百選 現代道徳講座 第七巻. 河出書房.
- Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. (2013). Moral foundations theory: The prag-

- matic validity of moral pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, 47, 55-130.
- Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and Conservatives Rely on Different Sets of Moral Foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 1029-1046.
- Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 101, 366-385.
- Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. New York: Pantheon. (ハイト, J. 高橋洋 (訳) (2016). 社会はなぜ左と右にわかれるのか. 紀伊國屋書店)
- 金井良太 (2015). 脳に刻まれたモラルの起源—人はなぜ善を求めるのか—. 岩波書店.
- 唐沢穰 (1994). 日本人の国民意識の構造とその影響. 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 246-247.
- Karasawa, M. (2002). Patriotism, nationalism, and internationalism among Japanese citizens: An eticemic approach. *Political Psychology*, 23, 645-666.
- 加藤弘之 (1912). 自然と倫理. 實業之日本社.
- Koleva, S., Graham, J., Iyer, Y., Ditto, P. H., & Haidt, J. (2012). Tracing the threads: How five moral concerns (especially Purity) help explain culture war attitudes. *Journal of Research in Personality*, 46 (2), 184-194.
- Kosterman, R. & Feshbach, S. (1989). Toward a measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, 10 (2), 257-274.
- 前田英樹 (2001). 倫理という力. 講談社.
- 松村明 (編) (2019). 大辞林 第四版. 三省堂.
- 大澤真幸 (2007). ナショナリズムの由来. 講談社.
- Smith, A. D. (1986). *Ethnic origins of nations*. Oxford: Blackwell. (アントニー・D・スミス, 巢山靖司・高城和義他 (訳) (1999). ネイションとエスニシティ—歴史社会学的考察—. 名古屋大学出版会)
- 高山岩男 (1976). 道徳とは何か. 創文社.
- Takeuchi, H., Taki, Y., Sekiguchi, A., Nouchi, R., Kotozaki, Y., Nakagawa, S., Miyauchi, C. M., Iizuka, K., Yokoyama, R., Shinada, T., Yamamoto, Y., Hanawa, S., Araki, T., Hashizume, H., Kunitoki, K., Sassa, Y., & Kawashima, R. (2016). Differences in gray matter structure correlated to nationalism and patriotism. *Scientific Reports*, 6, 29912.
- 田辺俊介 (2001). 日本のナショナル・アイデンティティの概念構造. 社会学評論, 52 (3), 398-412.
- 田之内厚三・土屋明夫・和田万紀・伊坂裕子・鎌田晶子 (共著), 田之内厚三 (編) (2014). ガイド 社会心理学. 北樹出版, pp. 84-85.
- 鄭雄一 (2013). 東大理系教授が考える道徳のメカニズム. KK ベストセラーズ.

(受稿: 2021年11月27日 受理: 2022年4月9日)